

笠井潔

ヴァンパイア戦争

2

月のマジックミラー

KADOKAWA NOVELS

星と血に端を発し、三種の神器をめぐる世の傀儡^{かいらい}たちが日本を舞台に抗争を開始しSF伝奇アクション待望の第2弾!



カドカワパブリズ

昭和五十九年十月二十五日初版発行
昭和六十年十月三十日三版発行

著者 笠井 潔かさい きよし

発行者 角川春樹

ヴァンパイヤー戦争ウォーズ 2

印刷所 暁印刷株式会社

製本所 株式会社多摩文庫

装丁者 岡村元夫

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二二三 振替東京三一五三〇八
〒一〇三 電話 営業〇三三三八八五二 編集〇三三三八八五二

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-04-771602-2 C0293

笠井 潔

ヴァンパイア戦争

2月のマジックミラー

KADOKAWA NOVELS

星と血に端を発し、三種の神器をめぐる
の傀儡^{かいらい}たちが日本を舞台に抗争を開始
SF伝奇アクション待望の第2弾!

角川

KADOKAWA NOVELS

●作者のことは

去年の九月まで地中海地方を旅行していたのだが、
外国において考へるのはかえつて日本のことが多かった。

九鬼鴻三郎は「不死の血」をめぐる国際的陰謀の背後に、
人類の文明の起源と天皇家による

日本建国の絡み合った謎を発見するのだが、
こんな構想も長期にわたる外国旅行のためだったかもしれない。

略歴―一九四八年東京生。処女作「バイバイエンジェル」で角川小説賞受賞。ミステリー、SF、評論の分野で活躍。

-771602-2 C0293 ¥680E

価680円



ガクカパベルズ

昭和五十九年十月二十五日初版発行
昭和六十年十月三十日三版発行

著者 笠井 潔かさい きよし

発行者 角川春樹

ヴァンパイヤー戦争^{ウォーズ} 2

印刷所 暁印刷株式会社

製本所 株式会社多摩文庫

装丁者 岡村元夫

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見三十三 振替東京三一九五三〇八
〒一〇二 電話 営業〇三三三八八五三 編集〇三三三八八四三

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-04-771602-2 C0293

KADOKAWA NOVELS

ウ
オ
ー
ズ
グ
ア
ン
パ
イ
ヤ
ー
戦
争
②

月のマジックミラー

笠井 潔

絵・本文イラスト／生頼範義

目次

序章 プラトール火口原

9

第一章 ヴァンパイヤーの帰郷

45

第二章 ロワシー館の娼婦

76

第三章 斉明プロジェクトの秘密

113

第四章 狂気のスーパー人工脳

149

第五章 法隆寺のワープ通信装置

199

終章 斑鳩からの脱出

244

序章 プラトール火口原

1

フロント・ガラスの前に広がるのは、どこまでも続くごつごつした裸の大地だった。でこぼこした斜面の起伏は、満月の何十倍も明るい地球光の青緑色の光にさらされて、くつきりと浮きあがって見える。……謎のSDポイント。そこにはいったいなが待ちうけているのか。

月面ローバーは、荒涼とした死の世界をゆっくりと前進していく。そのハンドルを慎重な手つきで操作しながら、ロバート・クレイン米宇宙少佐は、もう何度めかになる同じ眩きを洩らしていた。

MⅡ型月着陸船〈雄鶏〉が降下したのは、平坦で着地条件のよい火口原の中央部だった。直径一〇〇

キロに満たないクレーター〈プラトール〉は、月にあるクレーターのなかでは中程度の規模とわかっていい。最大のクレーター〈ベイリー〉は直径二九五キロもあり、深さは四〇〇〇メートルに達する。

それでも〈雄鶏〉を着陸させてみると、着地点からは、クレーターの周囲を円形に縁どっている外輪山の、その雄大な山容を眺めるようなわけにはいかなかった。地球と較べて、月の地平線は信じられないほどに近いからだ。

月では、地球の常識がほとんど通用しない。地平線が近すぎるため、ほんの少しでも遠方の地点になると、じきに見通せなくなってしまうというのもそのひとつだった。

月の地表のいたるところを分厚く覆っている月面表層土に、自在車輪で浅い溝を刻みながら、月面ローバーは砂漠の甲虫よりものろした動きで、傾斜角十二度ほどの緩斜面をもう三十分以上這いながら続けていた。

「見えたぞ」

ロバートが助手席のジョン・マッカーソン中尉に

いった。月面ローバーが斜面を登りきったのだ。前方にはようやく、外輪山のぎざぎざした山なみが眺められるようになっていた。

今度はかなり急な下向斜面だった。四十度はあるだろう。ロボットが手元のスイッチを操作して、六つあるヘッドライトを全部点灯した。地球光の射さない影の地帯に、月面ローバーを乗り入れたためだ。額がフロント・ガラスにぶつかりそうな急傾斜だった。マッカーソンは舌打ちして、宇宙服の上から補助シートベルトを装着した。前方の、ライトに照らされた場所以外は完全な闇だ。月面ローバーは、それ自体の重量でずり落ちるようにして、のろのろと暗黒の奈落へ降りていく。

二人が乗りこんでいる月面ローバーは、地球で火山性クレーターを走行するために設計された、大型の移動調査車によく似た外見をしていた。アポロ計画時代に使用された、金属フレームにモーターと車輪を取りつけただけという旧式ローバーとの最大の相違点は、車体が完全密閉になっていることだ。

運転席を入れて前部に二人、後部に二人と、合計

四人まで乗ることのできる密閉された車内には、適度の酸素を含む大気が満たされている。乗員は宇宙服の生命維持装置のスイッチを切り、息苦しいヘルメットを外して、快適に月面のドライブを楽しむことができる仕組みだった。

「三時間かかって、やっと外輪山が見えたと思ったら、今度はこの下り坂か。まったくうんざりだな。このあたり、坂は急だが地溝や断崖などの妨害物はないって、地図にあるぜ。ボブ、思いきってこのボンコツを、もう少し速く走らせてみることにしようじゃないか」

横あいから運転席のスピードメーターを覗きこむようにして、マッカーソンが話しかけてくる。デジタル表示のスピードメーターは、着地点を出発して以来ずっと、二〇マイルに満たない数字をオレンジ色に点滅させていた。暗い急斜面に入ってから、それが時として一〇マイルを割りそうになる。

「探査衛星の写真地図なんか、まるで頼りにはできない。特に急斜面になっている場所はな。それにこれは、カミングス大佐の命令なんだ。おれだって時

速五〇マイルでとばしたいさ。このローバーの性能なら、それくらい楽にでる。だが、ボスの命令だ。

時速二〇マイル以上の走行は禁止するってわけだ」

「だけど、ボブ。この調子じゃ夜が明けてしまいうよ、例のSDポイントに着くまでに。それまでのんびり待ってっていうのは、あんまりひどいじゃないか。ロシア人に先を越されたらどうするんだ」

「安心しろよ。朝になるのにはまだ四十時間以上あるし、ロシア人の宇宙船が月に着くのは二日後のことだ。それでも安心できないっていうのなら、ローバーを降りて走っていったらどうだ」

ロバートの言葉に、マッカーソンは大袈裟おおげさに肩を竦すくめ、苦笑しながら答えた。

「判わかりましたよ、少佐殿。どんなにのろまな芋虫だって、いつかはキャベツの葉っぱのあるところまで行きつける。それを信じておとなしく待つことにしまししょう」

同僚の、こんな子供じみた気せわしさを一応たしなめてはみたが、目的地SDポイントに一刻も早く到着したいという気持では、ロバートもマッカーソン

ンとたいして変わりなかった。そこには、人類という存在の意味を、根本から変化させてしまうほどの大発見が待ちかまえているかもしれないのだ。

月の大地へ激突する寸前に、月軌道探査衛星げんじつ（鳥）が電波にして送り出した写真映像はそれだけで、公表されれば全世界を驚倒させるべきものだったのである。

エネルギー危機の最終的解決のため、地球の静止軌道上に巨大な衛星太陽発電所太陽発電所を建造するという、アメリカの国力をあげて進められているサン・サット計画は、今のところまだ最初の五年間が過ぎたばかりのところだった。

予定では、計画第一段階の最初の十年間で第一号衛星太陽発電所を建設する。SSPS1は、約一五〇平方キロメートル——ニューヨークのマンハッタン島の三倍近い面積——の太陽電池板をもち、ニューヨークの消費電力をまかなえるほどの電気を極超短波ビームで地上のアンテナに送り続けるはずだ。

次の十年で、SSPSは合計二十号まで建設され、

衛星太陽発電所がアメリカ全体の消費電力を完全にまかなうことになる。計画の第二段階が達成されることにより、アメリカはエネルギー危機の悪夢から完全に、太陽が存在するかぎり未来永劫にわたって解放されるのだ。

サン・サット計画第一段階の十年間で、SSPS 1ひとつだけしか建設できないというのに、第二段階の十年間ではSSPS 2からSSPS 20まで、全部で十九箇もの衛星太陽発電所が建設できるという、この数字上の不均衡には理由がある。

衛星太陽発電所を組みたてるために必要な資材は、地球からだけではなく月からも調達される予定だった。衛星の集光板は、細いアルミニウム製の桁を蜘蛛の巣のように縦横に組みあわせた、全長何キロにもおよぶ巨大な構造物になる予定なのだが、桁の原材料のアルミニウムも、集光板に敷きつめられる太陽電池の主材料シリコンも、低重力の月から運べば、地球から運ぶよりはるかに経済的なのである。

したがってサン・サット計画の第一段階では、次の三部門の宇宙開発が同時に進められることになっ

ていた。

第一は、地上から静止軌道まで多量の資材を運び上げるための部門であり、二三〇トン以上の積み荷を運ぶことのできるスペーススカーゴの開発と生産がその中心である。スペーススカーゴ一号機が就航するまでのあいだは、スペースシャトルが利用されることになっていった。

第二は、衛星太陽発電所の建造に必要な足場を軌道上に設定するための部門である。三百人以上の作業員を収容できる宇宙ステーション、月から運ばれてくる原料でさまざまな資材を生産するための宇宙工場の建設が、ここでの主要な課題だった。

第三は、チタンやアルミニウム鉱石などの原材料を月で採掘し、衛星太陽発電所の建設現場まで運びだすための部門である。そのため、無人探査衛星による月面の資源調査、月軌道ステーションの建設、月面作業基地の建設、軌道上への鉱石運搬装置の建設などが進められている。

経済的な鉱石運搬のためには、月面上数キロにわたって登り坂になるように敷かれたレールが必要で

ある。超電動磁石の力で空中に浮いた運搬車が、電動モーターで加速されながらレールの上を疾走し、そのまま月の引力を振りきって宇宙空間へと投げとばされるといのが、その基本的な仕組みである。

レールの角度や方向は、鉱石を満載した運搬車が宇宙空間を飛んで、衛星太陽発電所の建設現場まで自動的に達するように、あらかじめ精密に調節されていなければならない。

過去五年間、スペースシャトルの荷物室から次々と打ちあげられた月面探査衛星〈へ鳥〉は、詳細きわまりない観測結果を地球に送信し続けていた。こうして得られた膨大なデータから、精緻な月面地図が作製され、月面基地や運搬レールの建設予定地も決定されるにいたったのである。

月面での調査活動や建設活動に必要な月軌道ステーションは、一年前に完成していた。ムーン・ステーションは、九名の常駐隊員を乗せて、月上空一〇キロの軌道を回っている。

この一年のあいだで、月面基地の原型になる気密テントの小さな村が、〈雨の海〉にある北緯四六度、

東経二度の地点、つまりデビル岬の東側に建設されていた。

この地点が選ばれたのは、月面ローバーで調査可能なその付近一帯に、アルミニウム、マグネシウム、鉄、チタンなどの有望な鉱脈が広がっていると確認されたためだった。デビル・ベースには、地質学や鉱物学の専門家を主力とする三十名近い隊員が常駐している。

ムーン・ステーションとデビル・ベースを支えるための補給には、地球軌道上に建設中の宇宙ステーション S S I を中継基地として、二機ある軌道間輸送船があたっていた。S S I までは、スペースシャトルが補給物資を運ぶ。

ムーン・ステーションとデビル・ベースをつないでいる月着陸船も二機しかない。一機が遭難した時のため、もう一機は常にその救出活動に備えていなければならぬから、實際上ステーションを離れて活動できるのは一機だけということになる。デビル・ベースへの補給は、M II 型月着陸船〈雄鷄〉によって、三日ごとにおこなわれていた。

本格的な月面基地建设のために活躍するはずの大
型月着陸船、MⅢ（鳩）は、現在、地球軌道上で組
み立てられているところだった。ムーン・ステーシ
ョンに配備されるには、あと三か月以上かかるだろ
う。

サン・サット計画が開始されてからもう五年が経
過していたが、第三部門である月面開発は、以上の
ような進行状態だった。予定通りにスペーススカーゴ
が就航すれば、あと五年のうちに最初の衛星太陽発
電所建設はなんとか実現できるだろう。

計画第一期の十年間をかけてSSPS1しか完成
することができないというのは、そのために月資源
をほとんど利用できないためなのだ。月面作業基地
と鉱石搬出装置が完成する計画第二期に入れば、S
SPS2以降の衛星太陽発電所建設は、当然にも加
速されることになる。

ロバート・クレインがカミングス大佐に呼ばれた
のは、MI型月着陸船（雀）の整備を終えて宇宙空
間からステーションのなかに戻ったばかりの時だっ

た。狭いエアロック前の通路で壁の手摺を掴み、二
重になった自動ドアから出てくるロバートを待つて
いたのは、マッカーソンだった。

ロバートが外した宇宙服のヘルメットを受けとり
ながら、いつもの陽気な口調でマッカーソンがいっ
た。

「ボスが呼んでる。なにか用があるらしいんだ。二
人でこいつてき」

「判った」

手早く宇宙服を脱いで壁面に造りつけのロッカー
に吊し、ロバートは白い光に溢れた通路を、漂うよ
うな動きでゆっくりと移動しはじめた。エアロック
のあるステーションの軸線に近いこのあたりでは、
回転によって生じる人工重力も微弱なものだったか
ら、どうしても泳ぐような動作になってしまう。

〈雄鶏〉に乗る時は、ロバートが正パイロット、マ
ッカーソンが副パイロットで、二人は一緒に行動す
る機会が多かった。ロバートの階級は少佐だったが、
四歳年下のマッカーソンはまだ中尉だ。

最近では、尉官のスペースパイロットも珍しくな

い。宇宙軍の組織が整備されてきたためで、マッカーソンは新設の宇宙軍士官学校の第一期卒業生だった。ロバート自身は、空軍士官学校を卒業した後、軍からの派遣学生としてマサチューセッツ工科大学で宇宙航法を専攻し、博士号を得た。

スペースパイロットになるためには、いくつもの大学でいくつもの資格を集めてまわらねばならないといった非能率が改善され、二十歳代で宇宙船を操作できる者がでてきたのは、ようやく最近になってからのことだった。尉官のパイロットが珍しくなくなったのも、そのためだといえる。

アメリカで、陸、海、空、海兵の四軍に続く第五軍として宇宙軍の創設が決定されたのは、サン・サット計画が開始される一年前のことだった。以後、スペースパイロットが公募されるという、それまでのシステムは廃止された。

宇宙軍の創設は、完成まで二十年間という長期にもおよぶ、アメリカの国力を傾注すべき巨大プロジェクト、サン・サット計画の決定によって促された措置だった。

アメリカはサン・サット計画に、衰退を続けるこの斜陽帝国の土台からの再生と再建を賭けていた。太陽から無限のエネルギーを汲みだしうる巨大衛星発電所の連鎖を、天空の高みに張りめぐらせることによって、二十一世紀はふたたび偉大なアメリカの時代となるだろう。

第一段階の十年間だけでサターン・ロケットの開発費の約五百倍、総額二兆ドルに達するというこの巨大プロジェクト予算を、二十一世紀にむけて組むべきかどうか、サン・サット計画の是非をめぐってアメリカの世論は完全に二分された。だが、サン・サット計画実現を公約に掲げたグレン大統領の誕生により、進むべき方向は基本的に定まったといっている。

数回にわたる原発事故、それをきっかけとする国際石油価格の騰貴、有人火星船の建造など競争相手ソ連による宇宙開発の急展開、等々の諸要因が、グレン候補の大統領選勝利に有利に作用したのだ。こうして、古代人によるピラミッドやストーンヘンジの建設に匹敵するサン・サット計画という人類史的